

第10回大町エネルギー博物館講演会 『市民科学』はみんなの科学



燕岳からみる低緯度オーロラと流星
(2024年8月13日未明 撮影：大西浩次)

2024年10月12日(土)

午後1時30分～3時

会場 大町エネルギー博物館
(大町市平2112-38)

入場無料予約制(定員40名)

申込 TEL 0261-22-7770

10/4(金)×切

「市民科学」というと、どんなイメージでしょうか。「市民科学」という言葉は、1990年代より欧米で提唱されてきたシチズン・サイエンス(Citizen Science)の日本語訳で、市民の参加による学問への寄与を含む広範囲の科学的活動を意味します。なんか、難しそうですね。実際に、ネットなどで触れられる「市民科学」の多くは、研究者が企画した研究テーマを市民が参加協力して行うスタイルが中心です。でも、市民が科学に関わるものは、そんなに狭いものなのではないでしょうか。天文学の世界では、新天体の発見から長期間に渡る黒点観測や変光星の観測に至るまで、多くのアマチュア天文家が活躍してきました。また、星空を観察する手段から表現する手段として、天体写真に関わる多くの方が活躍しています。さらに、天文ファンを増やそうと、多くの人々に観望会などを通じて教育普及活動している方もいます。私は、これらすべての活動が「市民科学」の活動だと考えています。そして、このような活動で生まれてきたものが(観測データや人的ネットワークなどを含む多くの事柄)、科学の重要な寄与につながるようなこともあります。たとえば、かんむり座T星の観測記録や、100年前の三澤勝衛の太陽黒点観測、これらは、最新の天文学の知識と組み合わせることで、今、大変貴重なデータであることがわかっています。また、最近では、長野県内で今年になって2回の低緯度オーロラが観測されたのか、紫金山・アトラス彗星(C/2023 A3)がどう見えているかなど、天文ファンの活動が、色んなところで科学とつながってきていることに気づきます。「市民科学」はみんなの科学です。「長野県は宇宙県」の活動を例に、身近な「市民科学」としての宇宙県とその展開についてお話します。

～ 講師 「大西浩次(おおにしこうじ)」 プロフィール ～

1962年富山県生まれ、長野市在住。博士(理学)。長野工業高等専門学校リベラルアーツ教育院教授。国際天文学連合会員、日本天文学、日本星景写真協会理事、「長野県は宇宙県」連絡協議会会長ほか。系外惑星探査や「市民科学」と天文文化の研究を行っている。いま、「長野県は宇宙県」を合言葉として、多くの人々と共に、天文文化を創る活動を行っている。

現在、毎日小学生新聞にて「ガリレオ博士の天体観測図鑑」を連載中。